

松任谷 正隆の

僕のひとりごと

24

VOL.24 暗黒の始まり

大学2年だか3年の時、半分プロみたいになっていた青学（多分中退）のドラマーからバンドをやろうぜ、と声を掛けられた。こんなカッコいいドラムを叩く奴は見たことない、と思っていたから（これまた多分）二つ返事でOKをした。

自分はそれまでアマチュアバンドをやってきた経験もあるし、バンドをやりながらでも学校は卒業出来るのではないかとどこかで思っていたのだと思う。

ドラマーはHとしておこう。Hはバンドをやるにあたって、ある人を紹介したいから一緒に来てくれ、という。

僕のクルマにHを乗せて一緒に行ったんじゃないか。場所は狭山だった。

そのエリアに入ると何だか風景が一変した。同じような形の小さな家がたくさん。

塀も柵もなく並んでいる。アメリカみたいだな、と言うと、

Hは「ここはアメリカ村だからね」と言った。

どうやらだいぶ昔、駐留していた米軍の家族が住むように建てられたらしい。今はもうみんな帰ってしまって、借家みたいなことになっているらしい。なんだかザ・バンドのミュージック・フロム・ビッグ・ピンクというアルバムを思い出した。

あのアルバムが録音されたという家も、サイズこそ違えど、こんなムードだったからだろう。

クルマはさらに奥に入っていき、アメリカ村の中程に停めると、Hは一軒の家の玄関を叩いた。

そう、チャイムなどなく、むき出しの玄関の木製の扉を叩いたのだ。

「はいー」という声とともに、一回りは年上な感じのおばさんが出てきて「あらHくん、どうぞどうぞ」なんて言った。

あれ、僕の方は見なかったぞ。僕も入ってもいいのかな……。

とオドオドしていると、おばさんはようやく「あなたもどうぞ」と言う。

ああ、居心地が悪い。帰りたい、とすぐに思った。



玄関を入るといきなり居間だった。

ソファには長髪でヒッピーみたいな年齢不詳な髭のおじさんが
ちょこんと座っていた。よく見ると歯がなかった。

どことなく不機嫌そうで、それでも H とはにこやかに
話していたから、僕が来たこと自体が嫌なのかも
しれない、と咄嗟に思った。

いったい何なんだ。H はどうしてこんなところに
僕を連れてきたんだろう。

後になって、H はこの人とバンドをやろうと思ってる、
と告白することになるのだが、もちろんこの時にはわからない。
居心地の悪い時間を過ごし、逃げるようにクルマに乗った。



帰りがけに H は、ここに住もうと思ってる、と言いだした。

いや、あのヒッピーと一緒に住むのではなく、俺たちで借りるんだよ、と言う。

それまで家を出たことのない僕にとって、共同生活なんて出来るのだろうか。

もう、不安でしかなかったが H の言うことだ。従うしかあるまい。

実を言うともう目星は付けてあるんだ・・・。

家賃は月 1 万円 2 千円でね、バンドは 4 人だから割ればひとり月 3 千円、いいと思わない？と続けた。

嫌な予感のはしたのだ。なんだか僕の知らない、暗い世界が広がっている感じがした。

それでも断らなかったのは、僕の中にどこか、音楽で生きていきたい、という気持ちがあったからだろう。

こうして僕の暗黒の時代が始まるのである。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4 歳からクラシックピアノを習い始め、14 歳の頃にバンド活動を始める。

20 歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンド SKYE を結成。

2021 年 10 月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。